大阪府

第38回人権啓発
詩・読書感想文
入選作品集

わたしのきもち いまここに つたえよう

主催／大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）
協賛／大栗紙工株式会社（OGUNO）、大阪信用金庫、大阪地区トヨタ各社、株式会社サクラクレパス

今回の入選者のみなさん

令和2(2020)年1月19日　ホテルプリムローズ大阪

大阪府広報担当副知事　もずやん

令和2(2020)年2月発行

主催　大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

目次

第38回人権啓発詩・読書感想文
募集・表彰事業について……2

詩の部門

小学校（小学部）低学年の部
きてくれて、ありがとう……4
見えない心のおくのおく……6
友だちと笑いあえる未来にしたい……8
一人一人ちがう……10
女だからとか男だからとか……12

小学校（小学部）高学年の部
みんなふつう……14
心の天気と言葉の天気……16
自由……18
みんな同じ。……20
言葉……22
自分らしく……24
きめつけないで……26
地球の記憶……28
「全部が同じ」じゃなくて良い……30

中学校（中学部）の部
私なら・あなたなら？……31

読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部
「心ってどこにあるのでしょう」をよんで……33
「かわいそうな　ぞう」を読んで……34

小学校（小学部）高学年の部
「ちがっている」と「変」……36
『人権を考える本②
　子ども・障害者と人権』をよんで……38
髪がつなぐ物語～ヘアドネーション～……40

中学校（中学部）の部
耳にもバリアフリーを……42
いじめ……44
いじめで死なせないを読んで……46

講　評……48

第38回人権啓発詩・読書感想文　募集・表彰事業について

一人でも多くの方に人権について身近に考えていただくため、人権の尊さやお互いの人権を守ること、差別のない明るい社会を築くことの大切さや平和の尊さを訴えることなどをテーマに、人権啓発詩・読書感想文を、府内の小・中学（部）生から募集しました。

○主催
大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

○募集期間
令和元年７月１日（月）～９月４日（水）

○応募、審査
詩部門・読書感想文部門合わせて90校から619作品の応募があり、審査委員会において23作品を入選としました。

詩部門

小学校（小学部）低学年の部

豊中市立東豊台小学校	１年	上村（うえむら）　柚心（ゆしん）
智辯学園和歌山小学校	２年	佐藤（さとう）　愛美（まなみ）
箕面市立萱野東小学校	３年	足立（あだち）　僚成（りょうせい）
箕面市立萱野東小学校	３年	天津（あまつ）　千愛（ちなり）
阪南市立下荘小学校	３年	東（ひがし）　千桜（ちさ）

小学校（小学部）高学年の部

高石市立高石小学校	４年	井手口（いでぐち）　暉（あきら）
枚方市立殿山第一小学校	５年	平岡（ひらおか）　遥美（はるみ）
寝屋川市立成美小学校	６年	巽（たつみ）　すみれ
寝屋川市立池田小学校	６年	藤林（ふじばやし）　果花（かはな）

寝屋川市立三井小学校	６年	高田（たかだ）　瑠依（るい）
寝屋川市立木屋小学校	６年	東條（とうじょう）　悠輝（はるき）
寝屋川市立木屋小学校	６年	廣本（ひろもと）　愛満（あいみ）
寝屋川市立点野小学校	６年	大山（おおやま）　華枝（はなえ）
寝屋川市立宇谷小学校	６年	住本（すみもと）　絢菜（あやな）

中学校（中学部）の部

交野市立第二中学校	２年	筒井（つつい）　彩絵（さえ）

読書感想文部門

小学校（小学部）低学年の部

泉南市立新家小学校	１年	佐々木（ささき）陽花（はるか）
アサンプション国際小学校	３年	天野（あまの）　利輝（としき）

小学校（小学部）高学年の部

枚方市立殿山第一小学校	５年	北川（きたがわ）　琴音（ことね）
	６年	木村（きむら）　佳純（かすみ）
泉南市立西信達小学校	６年	中井（なかい）　康裕（やすひろ）

中学校（中学部）の部

堺市立五箇荘中学校	１年	川島（かわしま）　佳純（かすみ）
岬町立岬中学校	２年	松本（まつもと）　美花（はるか）
大阪市立旭陽中学校	３年	村田（むらた）　亜聡（あさと）

○表彰式

令和２年１月１９日（日）　ホテルプリムローズ大阪

小学校（小学部）低学年の部

きてくれて、ありがとう

豊中市立東豊台小学校　一年　上村　柚心

ぶつだんをあけてみたら、
ほとけさまのおじいちゃんが、
「きてくれて、ありがとう。」
といいました。

ゆしんのかおをみれて、うれしいわ。
ひとりですんでいるおばあちゃんが、
「きてくれて、ありがとう。」
といいました。

なつやすみに、ぱぱがいいました。
ままは、ぼくがうまれたとき、
「きてくれて、ありがとう。」
といったそうです。

さいたまのおねえちゃんがやってきて、
ずっといっしょにすごしました。
くうこうでおねえちゃんがかえるとき、
「たのしかったよ。ありがとう。」
といいました。

みんな、みんな、
「ありがとう。」
といってくれたよ。

それが、うれしくて、うれしくて、
ぼくもみんなに、
「ありがとう。」
といったよ。

見えない心のおくのおく

智辯学園和歌山小学校　二年　佐藤　愛美

友だちが　ないている
お兄ちゃんが　わらっている
お母さんが　しんみりしている
お父さんが　ワクワクしている

うれしいの？　かなしいの？
たのしいの？　くやしいの？

心の中は　見えないね
見えないけれど　かんじるよ

わたしの心に　ひびいてる
みんなの心の　おくのおく

みんな　いっしょに　ひびき合おう

友だちと笑いあえる未来にしたい

箕面市立萱野東小学校　三年　足立　僚成

親友は友情で　できる
ただ友だちになるだけでは　できない
親友は親しい
大切な友だちということ
友だちをふやして　親友もふやしたい
何をしても　笑いあえる
未来にしたい

親友は友情で　できる
ただ友だちになるだけでは　できない
サッカーをやってくれる親友
さいしょは友だちだった

何回もやる内に　親友になれた
学校にかよったから
なれた親友もいる
何をしても　笑いあえる
未来にしたい

親友は友情で　できる
ただ友だちになるだけでは　できない
親友や友だちがいてくれて　うれしい
何をしても　笑いあえる
未来にしたい
できることから　はじめたい
友だちはいいもの
友だちを大切にしていきたい
みんなが笑える
世界にしたい

一人一人ちがう

箕面市立萱野東小学校　三年　天津　千愛

わたしは友だちがふしぎだ
一人一人ちがうのに
なぜなかよくなれるのか
しゅみもちがう
すきなものもちがう
どうしてだろう

こんなことがあった
かえり道
三人　一人一人
しゅみがちがう
二人と一人
しぜんにわかれた
どうしてだろう

それは
ふしぎなところだ
やっぱりぜんぶ
なかがいいのでは
なかった
でもわたしが
思うのは一人一人
ちがうこと
りかいする
そうすると
だれとでもなかよくなれる
いいことだ

女だからとか男だからとか

阪南市立下荘小学校　三年　東　千桜

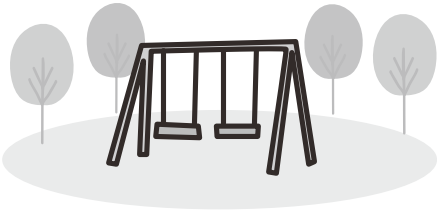
女だから男だから
女だから家事をする
男だから仕事をする
私はようち園の先生になりたい

女だから男だから
女だからピンク色
男だから青色
私は青色が好き

女だから男だから
女だからスカートをはく

男だからズボンをはく
私はほぼ毎日ズボンをはいている

女だからとか男だからとかだれが決めたの
もし決めた人がいるなら言ってあげたい
「ゆめも
好きな色も
お気に入りの服も
決めるのは私
あなたが勝手に決めないで」



小学校（小学部）高学年の部

みんなふつう

高石市立高石小学校　四年　井手口　暉

しょうがいがある人は
かわいそうだと思ってもらえたら
不自由なことを手伝ってもらえて
うれしいだろうか

ぼくにしょうがいがあったら
かわいそうだと思ってほしくない
そのときはそれがぼくのふつうだから

しょうがいのない人から見たら
しょうがいのあることがふつうじゃないだろう
しょうがいのある人から見たら
しょうがいのない人をいいなと思うかもしれない

でもそれはすききらいの多いぼくが
何でも食べれる人をいいなと思うのと同じ
しょうがいがあってもなくても
みんな自分がふつうで
自分のできないことをできる人をいいなと思う

だからしょうがいがあってもなくても、
同じだと思う

心の天気と言葉の天気

枚方市立殿山第一小学校　五年　平岡　遥美

心にも、言葉にも、実は天気がある
うれしかったらはれ
かなしかったらあめ
それと同じで
やさしく声をかけてくれたらはれ
いやな言葉をかけられたらあめ
ぼう力も
言葉のいじめも
それは、どしゃぶり
空の天気はかえられない
だけど、心と言葉の天気は
かえられる
自分の心がはれていたら

少しだけでいいから、はれを使い言葉にして
「だいじょうぶだよ。」
声をかけてあげよう
その一言ではれるから
あめあがりのはれた空を見ると
にじが見えることがあるけど
言葉も心も同じ
にじ色の言葉をかけると
心がにじ色にそまる
一言だけでもいいから
その、にじ色の言葉をかけてあげよう
いつか
みんなの心がにじ色にそまることをねがって

自由

寝屋川市立成美小学校　六年　巽　すみれ

「あの子わがままよなー。」
ミンナとちがうことをしてる子へのかげ口
私はよく耳にする
こわい。
聞くたびにそう思う

個性は大事　みんな自由だ
えらい人の言葉
確かにそう思う

でも自由に生きたらわがままと言われる
ミンナと同じことをする方が
個性なんてない方がいいと思う　私は

今は自由だとか言われるけど
それはミンナが許してくれるジユウ
恐怖のミンナの中で
どうやって自由になれるの？

みんな同じ。

寝屋川市立池田小学校　六年　藤林　果花

「あの子だからいいと思った。」
なんで？
なんでいいん？

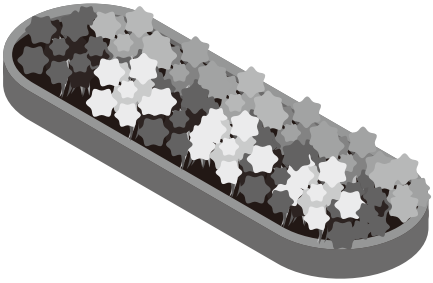
人はみんな、責められたら怖いんちゃうん？
人はみんな、文句言われたら嫌なんちゃうん？
人はみんな、陰口言われたら悲しいんちゃうん？
人はみんな、たたかれたら痛いんちゃうん？
人はみんな、言葉の暴力痛いんちゃうん？
あなたも、あの子も一緒やん。
みんな、一緒やん。

人はな、生まれた時みんな心にきれいな花畑があんねん。
一人一人心に咲いてる花がちがうから性格がちがう。

それを自分とちがうからって笑うんちゃうで。
おもしろくないで。
人の花畑を人がふみ散らかしてんねんで。
そのあらされた花畑は元にもどらんねんで。

言葉を出す前にちょっと待って。
一回立ち止まって考えて。
何かがひらめくんちゃう？

その一言、いるんかな？



言葉

寝屋川市立三井小学校　六年　高田　瑠依

人間が自由に使うことのできる言葉
自由だからこそ怖く
自由だからこそ楽しく
自由だからこそむずかしく
自由だからこそ
その責任は重い
何げなく使った言葉が
人をきずつけ
何げなく使った言葉が
人をはげまし

何げなく使った言葉が
人を不安にさせ

何げなく使った言葉が
人をなごませる

わたしはどうせ使うなら
人を笑顔にする

言葉を選びたい

自由だからこそ

その責任は重い

自分らしく

寝屋川市立木屋小学校　六年　東條　悠輝

自分ってなんだろう
女性なのかな
それとも男性なのかな
なんで普通ができないんだろう・・・・
自分は他の子とちがう
なんで同じにしないといけないの？
自分は自分でしょ
なのになんで・・・・
これっていけないの？
ちがうでしょ
自分は自分らしく
みんなそれぞれちがうから

だから
本当の自分を見つければいい
自分は自分らしく
他人は他人でいいと思う
これがぼくは本当の普通だと思う

きめつけないで

寝屋川市立木屋小学校　六年　廣本　愛満

きっと困ってる
きっと苦しんでる

男の子でしょ
女の子でしょ
男の子なら
女の子なら
普通はこうでしょ

なんて言わないで
理解してあげよう

性の多様性

地球の記憶

寝屋川市立点野小学校　六年　大山　華枝

僕は知ってるよ
人が争って苦しんで生きてること
時に暴力をふるったり
暴言をはいたりしてること

「やめて」って言っても
僕の声は届かない

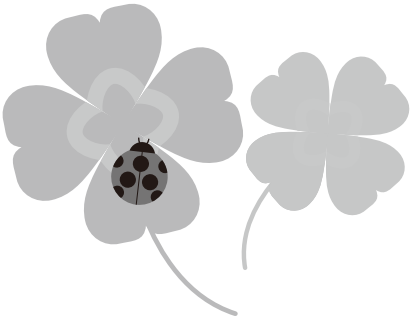
僕は知ってるよ
人が愛し合って助け合って生きてること
時に笑い合ったり
幸せを分かち合ったりしてること

その笑顔を見ていると
こころがぽかぽがあたたまる

僕は知ってるよ
人は重い重い命をせおって
必死に生きてること

命がつきるまで見守っているから
だから
負けないで

僕の名前は
地球



「全部が同じ」じゃなくて良い

寝屋川市立宇谷小学校　六年　住本　絢菜

私はあの人のようになりたい
あの人は私の目的地だから。
だけど、たまに思う。
本当に、なれるかな？
なれるまで、がんばり続けられるかな？
でも、気づいた。
「全部が同じ」じゃなくて良い。
「まったく同じ」なんて、つまらない。
「だれかをコピーした自分」なんて、
おもしろくない。
「ちがうところがある」方が良い。
「個性がある」方が良い。
だから、
「自分らしさ」をのこしたまま、
少しずつ、少しずつ、
だれかのいいところを
つけ足していこうよ

中学校（中学部）の部

私なら・あなたなら？

交野市立第二中学校　二年　筒井　彩絵

私が友達と遊んでいるとき
仲間外れにされている人がいるかもしれない。

私が家族に相談しているとき
ひとりで悩みを抱え、誰にも相談できない
人がいるかもしれない

そして
私が夢を見ているとき
誰かが自殺をしてしまっているかもしれない。

私の軽はずみな一言で
誰かが悲しむかもしれない。
でも

私のいじめを止める一言で
1つの命が救えるかもしれない。

もしそのいじめを止める一言で
笑顔がふえるのなら、
私はいじめを止め続ける。

あなたがふと前を見たら
いじめられている人がいた。

あなたなら、どうしますか。

読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部

「心ってどこにあるのでしょう」をよんで

泉南市立新家小学校　一年　佐々木　陽花

わたしは、はじめてこのほんのだいめいをみたとき、「ぜったいしんぞうにきまってるやん。」とおもいました。なぜかというと、びっくりしたときは、しんぞうがドキッとするし、一さいのおとうとが、わたしのほうをみてにこっとわらってくれると、しんぞうがキュンとするし、ぴあののはっぴょうかいできんちょうすると、しんぞうがドキドキするからです。

でも、ほんをよんでいると、こころはほっぺにあったり、あたまにあったり、おなかにあったり、いぬのしっぽにあったり、なみだやこえのなかにあったり、いろいろなところにありました。わたしは、そんなかんがえかたもあるんだなとおもいました。

わたしのこころがいっぱいうごいたのは、いちねんせいになって、はじめてしょうがっこうへいったときです。しらないともだちばっかりで、なかなかなかまにはいれず、ドキドキしていました。でも、おもいきってかえるまえに「いっしょにあそぼう。」といってみました。いうまえは、しんぞうがドキドキするだけじゃなく、からだもカチカチしていたし、てもつめたくなりました。ともだちは、「いいよ。あしたからいっしょにあそぼう。」といいました。わたしは、うれしくて、こころがにこっとしたきぶんになりました。からだもほわんとやわらかくなったし、てもあたたかくなりました。

わたしは、やっぱりこのほんみたいに、こころはいろいろなところにあるのかもしれないとおもいました。

わたしも、これから、ともだちのこころをにこにこにできるひとになりたいです。

「心ってどこにあるのでしょう」
作　こんの ひとみ
絵　いもと ようこ
金の星社

「かわいそうな　ぞう」を読んで

アサンプション国際小学校　三年　天野　利輝

どうぶつえんのひとは、いしのおはかを、いつまでもなでていました。せんそうの時にしんでしまったぞうのことを作者に話すシーン。

ぼくも、ぼくのひいおじいちゃんの名前がこく印された石ひを見に行った時、かわいそうと思わず言いながら名前の石ひを何回もなでていた。ぼくのひいおじいちゃんは、せんそうがおわる一日前に大阪大空しゅうにあい二十七さいで、亡くなった。ぼくのおじいちゃんが、ひいおばあちゃんのおなかの中にいる時。ぼくのおじいちゃんに会いたかっただろうなと思うとかわいそうだ。でも、九才のぼくのおたん生日、大阪に遊びに行った時、「ピース大阪」に通りかかった。ひいおじいちゃんの名前がこの「刻（とき）の庭」に刻まれている。きっと元気にがんばっている、ぼくやぼくのおじいちゃん、家族に会いたがっていたのかな。そう思うと、ひいおじいちゃんの分まで元気にがんばりたい。

うえのどうぶつえんのひとたちは、えさも水さえも食べさせてあげられなかったぞうが、やせこけたはなをたかくのばして、ばんざいのげいとうをしたまましんでしまってかわいそうとなきふせた。

読んでいて、ぼくが考えたことがある。せんそうは、かわいそうに思うことだけでは、足りない。かなしいことをこわがらず、ちゃんとその時のことを知りたいと思った。だからおじいちゃんに、ひいおじいちゃんがどんな人だったか知りたいからと伝えた。するとせんそうのテレビのチャンネルをかえたり、せんそうの話しをしたがらないおじいちゃんが、ひいおじいちゃんの話をしてくれた。かごしまけんから大阪に、はたらきに来ていてひいおばあちゃんは、かごしまけんにそ開していた。ひいおばあちゃんは、毎年大阪造へい局のさくらの通りぬけに行っていた。ひいおじいちゃんが、亡くなった大事な場所だから。おとなしくてまじ目でやさしかったみたい。しゃしんを見たら男前だった。ぼくだって会ってみたかった。

「せんそうは、にくたらしい。」

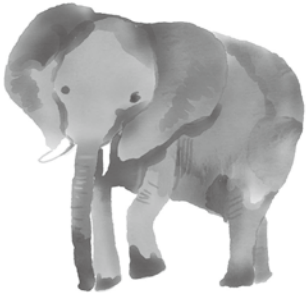
おじいちゃんは、今もそう言っている。それなのにぼくには、せんそうの時のひいおじいちゃんの話をしてくれた。ぼくがひいおじいちゃんの名前をなでていたように、

おじいちゃんは、形見の手ちょうを大事になでながら話してくれた。

うえのどうぶつえんのぞうたちも、ぼくのひいおじいちゃんも、せんそうで亡くなった人たちは、みんなかわいそうだけじゃなく、くやしかったね。つらかったね。こわかったね。と思ってほしいんじゃないかな。

だからこそ、せんそうのことやせんそうでつらい人の気もちを知っていきたい。そして、ご先ぞさま、家族、先生、友だちのことを大切にしたい。もちろん元気なぼくの事も。

「かわいそうなぞう」
文　土家　由岐雄
絵　武部　本一郎
金の星社



小学校（小学部）高学年の部

「ちがっている」と「変」

枚方市立殿山第一小学校　五年　北川　琴音

わたしは、このお話を、読んで、「ちがっている」と「変」について、改めて考えてみました。このお話は、主人公のキーランという男の子の前に、ある日いとこのボンという名の子があらわれ、同じ学校に通うことになるのですが、風変わりな転校生のボンは、学校でいじめの標的となってしまいます。キーランは、ボンを助けたい気持ちはありましたが、いざとなると、勇気が出ませんでした。

ですが、そんな中、はじめに立ちあがったのが、ボンと同じ時に、同じ学校に引っこしてき、ボンと二番の親友になったジュリアという女の子でした。ジュリアは、ボンをいじめるグループから、どんなに悪口を言われたりしても、ボンを守ってあげていました。そして、その勇気は、ついにキーランの意思までも変えたのです。

わたしは、その出来事を読んで、ジュリアは周りの人の意思を変える勇気を持っていて、すごいと思いました。

なぜなら、わたしは人としてまちがっている事をしている人に、

「それは、まちがってるよ。」

とは言えても、その人の意思を変える事は出来ないからです。

もし、ジュリアという子が転校してこなかったら、キーランは、ボンを助ける事が出来ずに、ずっと、心の中で苦しむことになっていたと思います。

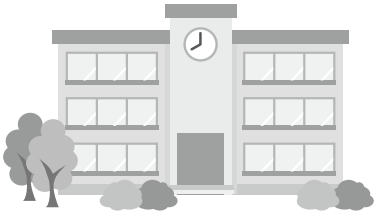
いじめっ子たちが言う「ボンは変、おかしい」というのは、わたしは、良い意味で、ボンが他の人とはちがっている、それはつまり、ボンが持っている「個性」だと思いました。人は、それぞれちがっていて当たり前です。ですが、そのそれぞれの「個性」をみとめ合う事が、必要だとわたしは思います。

たとえ、少し苦手な子でも、「もういやだ、きらい。」と決めつけるのではなくて、別に、無理に好きにはならなく

て良いけれど、一つぐらいは、良い所がぜったいあるはずなので、見つけてあげて、その個性を少しでもみとめ合えたらすてきだし、自分自身もそうなりたいと思いました。

そしてなにより、個性をみとめ合うことによって、いじめが少しでもへったらいいな。と思いました。

「ひとりじゃないよ、ぼくがいる」
作　サイモン・フレンチ
訳　野の　水生
福音館書店



『人権を考える本②　子ども・障害者と人権』をよんで

六年　木村　佳純

私は、人権についてよくわかりませんでした。それでこの本を読み、人権についてきちんと考えました。

その体験談は「死ぬのはこわくなかった」という話です。主人公の信彦君は中学三年生で、クラスの中ではいつもいじめがおきていたそうです。しかし、いじめる原因は何一つないそうです。私は、これを聞いてとてもおどろきました。なぜ、いやなことをされてもいないのにいじめるのだろうと思いました。私はこのような話をきくと毎回考えることがあります。それは、「言った側は大したことでなくても言われた側はそのことについて深く考える」です。これは、いやなことには限りません。いいこともです。相手が言ったことに対していわれた側はいいことだったらうれしいし、反対にいやなことだったらおちこみます。しかし、言った側はそのことをすぐに忘れてしまいます。おかしいと思いませんか。とても無責任です。しかし、人間はこれがふつうになってしまっているのです。今回の体験談の主人公、信彦君は、このような現象のせいで死のうとまで思ってしまったのです。幸い、家族が気付いて助かりましたが、いつこのようなことがどこでおこりうるのかわかりません。

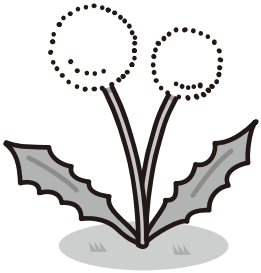
私も一度、とてもなやむ問題をかかえることがありました。私は仲のよい友達がたくさんいました。その中に一人、個人的には好きでしたがクセがあってきらわれている子がいました。いじめほどではなかったけれど、みんなとあつかいがちがったり、ひどいことを言われたりしていました。本人の前では、

「大丈夫。そんなこと気にするな。」といっていました。でもいわれるところをみても「今自分がとめたら私も悪くいわれちゃうのかな。」と思い、いつもふみだせずにいました。しかし、その子の悪口をいっているところを見ると、とても悲しい気持ちになりました。だから、毎回どうするべきか考えていました。ある時、その友達が、かげでとても悲しんでいる姿を見つけました。そこで、はじめて大切なことに気がつきました。「一番悲しんでいるのは友達。他のだれでもないんだ。」と。そこから私は堂々と、その友

達と仲良くしました。でも注意まではすることができませんでした。しかし、今回の体験談の信彦君は、身内の信用していた人にまでがまんしろ。といわれてしまい死のうとしてしまいました。だからどんな形であろうとその人なりに、いじめられてる友達を守ってあげたらいいと思います。なにより、一つ一つの言葉に責任をもって、このようなことにならないように一人一人が努力していけばいいと思いました。

私は、この作文を書いて少し人権についてわかりました。少しずつでもいいから、このようなことを理解していっていじめや自殺がなくなればいいな。と思いました。

「人権を考える本②
子ども　障害者と人権」
著　坪井　節子
児玉　勇二
岩崎書店



髪がつなぐ物語～ヘアドネーション～

泉南市立西信達小学校　六年　中井　康裕

僕の妹は小学三年生。生まれてから八年ずっとのばしていた腰まである髪をバッサリ切った。「ヘアドネーション」をしたらしい。それがこの本との出会いだった。

白血病や小児ガンなどの治りょうで髪が抜けたり、無毛症で生まれつき髪や眉毛がない子や髪が抜ける脱毛症で悩んでいる人が、いるそうだ。そのことでいじめられたり、からかわれたり、不安を抱えている子がいるそうだ。僕は三年の頃に友達に悪口みたいなことを言われたことがある。人は見た目で判断してしまうことがある。

ヘアドネーションは、長くのばした髪を寄付して医りょう用ウイッグを作って髪を無くした子供たちに届けてあげるのだ。日本で最初にはじめたのが大阪府のサロン、ジャーダックだ。ジャーダックには全国の賛同サロンから提供してくれた髪が届いてそれを海外の専門業者に送ってトリートメントして、日本人の髪の色にそめて、一本一本手作業でまとめてウイッグに使う髪となるのだそうだ。この費用はダンボール一箱分で三十万円かかる。さらに一つのウイッグを作るには二十～三十人の髪の毛が必要なのだ。その髪の長さは三十一センチ以上だから約三年は伸ばさないといけない。大切にのばした髪を提供することはとても勇気がいることだと思う。妹ははじめて短く切った髪で家に帰ってきたらとてもはずかしそうだった。でもとても、似合っていた。

この本の中では、いろんな理由でウイッグを希ぼうする子供たちの今までの生き方や、ウイッグが届くまでの様子が書かれている。中にはウイッグがとどくまでに病気が悪くなって亡くなってしまった子もいる。でもウイッグをつけてとても喜んだり髪があったころのふつうの生活がおくれる事をとてもうれしい報告も書いてあった。そのえがおを見て、家族も安心して心のやすらぎをとりもどせる。

僕はこれから先、髪を三十一センチのばすことは絶対無いと思うけどヘアドネーションが何なのかを知ることができて、髪の悩みを持っている人の存在を知ることができた。人は見た目ですぐ思ったことをすぐ口に出してし

まって相手をきずつけてしまうことが日じょうたくさんある。だから、僕は心の目で見ようと思う。そして妹が人の役に立てたことがすごいと思う。

ヘアドネーションは献血とちがって、年齢や性別にかんけいなく子供でもできるボランティアだ。ヘアドネーションをつうじて人と人とが心で接することができたらいいと思う。

「髪がつなぐ物語」
著　別司　芳子
文研出版

中学校（中学部）の部

耳にもバリアフリーを

堺市立五箇荘中学校　一年　川島　佳純

「聴覚過敏」を知っていますか？

五月のある日、母に言われて読んだスマホのニュースの内容に、私はとても驚きました。そこには、香川県高松市に住む、聴覚過敏に悩む中学三年生の女子生徒が、学校や県を動かして、運動会でのピストル音の使用を止めることができたということが書かれていました。自分と同じ年頃の女の子にそんなことができたのかという驚きと共に、自分がずっと悩んでいたものは、「聴覚過敏」という名前の症状だったのかということが分かり、それについて、もっとくわしく知りたいと思い、この本を読んでみることにしました。

この本には、聴覚過敏の仕組みと、その診断方法、治療方法などが、とても専門的に書かれています。初めて見る医学用語や見たことのない英語などがたくさん出てきて、最初は読むのにとまどいました。でも、その都度対訳一覧やインターネットで調べて、何とか読み進めることができました。

筆者によると、聴覚過敏というのは、大抵の人が十分我慢できる音に対して、苦痛や嫌悪を感じるという症状が出てしまうものであり、その原因には、耳の病理と関係するかもしれない生理学的なものだけでなく、心理学的な要素も含まれているということが考えられるそうです。また、「聴覚過敏」と一口に言っても、一人一人が苦痛に感じる音は異なり、それらの音にどれほど傷つくかも、皆違っています。雑音や話し声、手をたたく音に苦痛を感じる人もいれば、テレビや掃除機からの音が苦痛を引き起こすと訴えている人もいて、その苦痛に感じる音を聞いて、いらいらしてしまう人もいれば、緊張する人もいて、恐怖を覚えてしまう人もいれば、耳に痛みを感じる人もいるそうです。これらの音を聞いても、苦痛を感じたり、不快に思ったりする人はごく一部で、大部分の人が当たり前に感じる音だと思いますが、聴覚過敏の人にとっては問題となる種類の音になってしまうのです。

私がこの本の中で、一番心に残った言葉は、「より多くの人が聴覚過敏に関わるべきである。」という言葉です。私はこの筆者の意見に深く賛同しました。なぜなら、今回聴覚過敏について詳しく知りたくて本を探しましたが、図書館でも学校でも、この一冊しか見つけることができず、それほど日本ではあまり知られていない分野なのではないかと感じたからです。

私は、ピストルの音や風船の割れる音、打ち上げ花火などの破裂音が苦手です。その音を聞くと、怖くてその場所から少しでも遠くに逃げだしたくなります。音が苦手なだけで、花火大会や運動会は大好きなのに、音が苦手なことを知られると、花火にさそってもらえなくなったり、運動会でも全力を出すことができず、悲しく、くやしい思いをしたことが何度もありました。

私の母校の小学校では、今年から、運動会でのピストルの使用がなくなり、笛で代用されるようになりました。もう一年早ければ、私も耳をふさがずに、思いっきり競技に参加することができたのにと思うと、少し残念な気がしましたが、自分の周りで少しずつですが、理解され、そして改善されていくのを見ていると、これからもっと安心して暮らせる世の中になるのではないかと思えて、少しうれしくなりました。

私は、より多くの人が、この症状について知り、理解を深めることで、聴覚過敏の人達が安心して学校生活や社会生活を送ることのできる、優しい世の中になればいいと思います。そのために、決してわがままではなく、本当に音で困ることのある人がいるという事を、まずは自分の周りの人達に伝え、理解の輪を広めていきたいです。

「聴覚過敏―仕組みと診断そして治療法」
著　デービット・M・バグリー
　　ゲルハルト・アンダーソン
訳　中川　辰雄
　　海文堂出版

いじめ

岬町立岬中学校　二年　松本　美花

私は本屋さんで本を探しているときにこの本の題名を見て、すてきだと思ったので手にとって見ました。ページをパラパラめくるといじめについての本でした。私は中学校に入りいじめについて考えることが多くなりました。私の中学校には「いじめあかん文化」があります。いじめをなくそうと全校で頑張っています。人権について考える「ぴ～ふる」という部活があって私はその部活に入って今年は全校集会でいじめをなくすためのアピールをしました。私がこの本を読んで一番心にのこったフレーズは「今夜、死のうと思います。」です。このフレーズを見た時私は、「いじめは人を死に追い込むとてもこわいもの」だと思いました。私はいじめを受けたことがあります。その時のことは今も思い出したくない辛い事です。学校に行くのが嫌でたまらなかったです。みんなの目がこわくて、無視されたり、陰口を言われたりしました。陰口は聞かないようにしようとしても聞こえてきてとても辛くなります。「この陰口は自分の事じゃない。」と思いたくても思えなかったのです。こういう体験が主人公と重なり、思いました。

主人公は、いじめを受けるようになってから人の目を気にするようになっていて私と同じだと思いました。私も主人公もいじめを受けてから、人の目を気にして前を向かずに下をずっと見ていました。発表のとき先生に「前を向いて話しましょう。」と言われても前を向くことはできなかったです。人の顔を忘れそうになるぐらい人の目を見て話すことができなくなりました。人の目を気にして自分らしいことができなくなり毎日がつまらなかったこともありました。主人公の死にたいと思う気持ちがとても分かりました。

しかし私は、いじめの辛さが分かっていたのにいじめを見て見ぬふりをしてしまったことがあります。見て見ぬふりをするのもいじめだと分かりました。「いじめはダメ」と言いたくても次は自分の番と思って言えなかった自分に今とても腹立ちます。友達を助けることができなかったと思うと涙が流れることもあります。今は、いじめ

を見たら「いじめはダメ」と言えるようになろうと思いました。

主人公はラジオの番組の言葉や歌を聞いていじめに立ち向かおうと思えました。私は母に相談して「大丈夫、自分らしくいたら」と言ってもらい「自分らしくいれば良いんだ」と思うことができました。主人公は、ラジオを聞くこと、私は母に相談したことでいじめを乗り越えることができました。なんでもいい一つのことでも自信が持てたらいじめに打ち勝てるのではないかと思いました。

この本を読んで気づいたことがあります。いじめがあったことで幸せになる人は一人もいないことです。いじめられた人もいじめを見ていた人もいじめた人も最終はみんな傷つくということです。いじめがあることでいいことなんて一つもありません。

私は学校でいじめについて考えて自分の意見をもって周りの人たちと対話しています。私はたくさんの人たちと対話することでいじめはなくなると思っています。いろんな人のことを知って、自分のことも知ってもらうといじめはなくなるのではないかと思いました。今私ができることは、少しでも多くの人にいじめがどれだけ、してはいけないものか伝えることと、いろんな人のことを知ることです。

これから私は、自分の意見をたくさんの人に知ってもらうために、近くにいる人だけでなく、人前に立ち堂々と自分の意見を言える人になりたいです。

「きっときみに届くと信じて」
作　吉富　多美
金の星社

いじめで死なせないを読んで

大阪市立旭陽中学校　三年　村田　亜聡

一年前、この本が届いた。送り主は著者である岸田雪子さんだ。ぼくは、一気に読んだ。

この本では、岸田雪子さん自らが、丁寧に取材をし、被害者本人や被害者家族、被害者遺族の心に寄り添いながら、子ども達の命を救うために周囲の大人は何が出来るのか、対策はどうなっているのかがわかりやすく書かれている。この本に出てくる一つがぼくの事例だ。

最初、この本の取材のお話をいただいた時ものすごく驚いた。ぼくよりも苦しい思いをしている子どもはたくさんいるのに、ぼくなんかでいいのかと思ったからだ。岸田雪子さんと実際にお会いして話をしていくうちに、真剣に子ども達を救いたいという思いが伝わってきて本当にうれしかった。ぼくの事もたくさん気遣ってくれた。がんばってきた全ての事が認められたようでうれしかった。

この本を読んで、被害者の気持ちが痛いほどわかって苦しかった。ぼくも、同じ思いを経験したからだ。心が弱いからいじめられるのだという人もいるけれど、それは違う。誰でもいじめられると心が弱くなってしまう。いじめられていい理由なんてないと知りながらも、自分にいじめられる原因があったのではと考えてしまうし、いじめられる事を周りに知らせるべきだとわかっていても、自分が誰からも必要とされていない、まるでこの世に必要のない人間だと自分自身が認めてしまうようで、みじめすぎてなかなか出来ない。だからこそ、周囲の大人がＳＯＳに気づいて心に寄り添い、適切な対応をする事が何よりも大事なのだと思う。この本には、こどものＳＯＳの気づき方についても書かれているので、より多くの人に読んで欲しいと思った。

この本の中でぼくの事案は一部しか書かれていない。でも、本当はもっと多くの人達に支えられて、ぼくは生き続けると決めた。

ぼくは、小学二年生の時、いじめでＰＴＳＤを発症した。学校や周囲の理解が得られなかったので、環境も病状も悪化した。いじめそのものも苦しかったけれど、いじめが周囲にわかった後の学校の不適切な対応には、もっと、苦しんだ。少なくても、いじめだとわかれば、先生は助けてくれると思っていたのでぼくは学校全体にとって邪魔な存在なのだと感じ何度も死にたいと思った。でも、ぼくは今も周囲の支えによって生きている。一番は、家

族の存在が大きかった。〝学校に行きたいと思うあなたの気持ちは間違っていない〟と、家族はぼくの思いを肯定し続けてくれた。特に、お母さんはすごかった。〝子どもが学校に行きたいと言ったら、大人はどんな事をしてでも行かせてあげないといけない〟〝みんな仲良く学校に通えてこそ、平等〟〝どうすれば学校に安全に通えるのか、みんなで考えないと行けない〟と言って、助けてくれそうな場所全てに相談行ってくれた。ぼくにも〝本を読む事でいろんな経験がつかめるから〟と言って、本をたくさん買ってくれたし、いろんな図書館に連れて行ってくれた。ぼくの気持ちを理解してくれそうな人や人権を学べる場所にも、たくさん連れて行ってくれた。〝生きて欲しい〟と思ってくれる人が、家族以外にもいてくれる事は力になった。次に、たった数人だけど、学校の中に寄り添ってくれる先生がいた事もぼくにとって大きかった。

ＰＴＳＤを発症してからの一年間は、ぼくの病状や状況について、一部の先生しか知らなかった。でも、一年経った頃、どうしてよいかわからず、学校で泣いていた母を見た一部の先生が〝思っていたより深刻な状態〟である事に気づき、〝教育を受けさせてあげないといけない〟と家庭訪問をしてくれるようになった。先生は、苦しいぼくの気持ちを全て受け止めてくれた。そして、〝学校は無理して行く所ではない。無理しなくても行ける所でないと行けない。亜聡にとって、学校が安全で安心して通える場所でないなら、それは先生が悪い。力がなくて、本当にごめん。先生、頑張るから〟と言ってくれた。そして、校長先生にもぼくの思いを伝え続けてくれた。

いつでも、ぼくの味方だった。校長先生に思いが伝わるまで、長い月日がかかったけど、踏ん張れたのは、〝間違っていない〟とぼくの思いを肯定し続けてくれた家族や先生がいたからだと思う。

ぼくは今、同じように苦しんでいる子ども達に寄り添える仕事がしたいと思っている。経験から来る言葉だからこそいやせる心がある事を知ったからだ。ぼくのように傷ついている子には、とにかく生き続けて欲しい。誰かをいやせる人にきっとなれると思うから。

この本には、子どもを救うためのヒントが多く書かれている。みんなで読んで、どうすれば全ての子ども達が命だけでなく心も救われるのか、そして、安心してやり直すための考えるきっかけになって欲しいと思った。

「いじめで死なせない」
著　岸田　雪子
新潮社

講　評

審査委員長　古川　知子
（神戸親和女子大学）

今年度「第38回人権啓発詩・読書感想文」に、大阪府内から619点の応募がありました。内訳は、詩部門で399点、読書感想文部門で220点です。一次審査通過作品が61点、入選作品が23点になっています。多くの応募作品の中から選ばれた23人のみなさん、おめでとうございます。入賞を心からお祝い申し上げます。

詩と読書感想文の部門ごとに、小学校（小学部）低学年・高学年、中学校（中学部）に分けて、審査をさせていただきました。いずれの作品も、子どもたちの豊かな世界をともに旅させていただく機会となり、私たち委員や関わる事務局の職員にとって、かけがえのない機会となりました。

まず、詩の部門です。小学校1年生が様々な場面に出会い〝ありがとう〟と感じる温かい経験を、1年生らしい言葉で表現していたことが評価できる。整った言葉で表現するのではないところが、〝そのまま読んだ人の心に響く〟。そして、子どもが〝客観的に自分を見ている視点は子どもが読んでも共感できる〟のではないかという評価を委員会で共有させていただきました。子どもの言葉が、子どもの心に届くことが素晴らしいと考えます。

次に、読書感想文の部門です。子どもたちが選ぶ本が多様になっています。子どもの障がいの理解を促すための解説書のようなものも含まれています。恐らく、学校での学級文庫など、子どもたちの実態や興味関心を大切にしながら、すぐ選ぶことのできる工夫がされているのではないかと想像します。

本委員会では、このような作品についても、読書感想文として、子どもたちが感じて言葉にして表現してくれていることを尊重していきたいという結論になりました。

本取組みに向け、保護者の方々を始め、大阪府内の小学校・中学校・支援学校において、教職員の方々が子どもたちに寄り添っていただいたと思います。この作品集が大阪府内の各学校等において活用され、人権課題に子どもたちが向き合う活動が、今後も拡がることを願っております。